



「水利が拓く 実りの明日へ」  
キャンペーン

# 木原四郎の 水利を歩く

新潟市在住のイラストレーター  
木原四郎さんが1年をとおりて、  
新潟農業を支える水の流れを訪ね歩き、  
風景や人とのふれあいを描きました。

新川河口排水機場に流れる  
水面には様々な沿岸の歴史が  
映されているようだ。

整備された  
一日市ひかり農産のほ場、  
中心の一直線に伸びた農道との  
バランスが美しい。

工事を終え  
水の流入を待つ  
市野新田ダム。  
湖底からの景色は  
見納めだ。

大日山から吹く風で  
稲穂がゆれる。  
矢田営農組合の田園。



高台から見下ろすと  
山に抱かれるという  
言葉そのままの  
魚沼の田園だ。



川が交差する  
西川水路橋には  
工事に当たった先人の  
思いがあらわれている。



木原四郎さんが1年間で  
巡った新潟の農業水利事業



掲載された紙面は  
特設サイトで  
ご覧いただけます



## PROFILE

1946年、佐賀県佐賀市出身。  
「旅するイラストレーター」として  
新潟県内を歩き、風景や人物  
を描き続ける。独特の柔らかい  
タッチのイラストと心温まる文  
章で人とモノとの出会いを紹介  
し、人気を集める。NHK総合  
「金よう夜きらっと新潟」に出  
演。各地で展覧会も開催する。



イラストレーター  
木原 四郎さん

山間から河川へ！  
水の流れのように  
田畑をうるおす。  
そして、  
豊穡なる大地に！  
水利を歩く二年目の旅  
自然への畏敬の念  
忘るべからず。

この紙面を読んだご感想を、ハガキ、ファクス、Eメールでお寄せください。

お問い合わせ

「水利が拓く 実りの明日へ」キャンペーン事務局（新潟日報社広告部内）

新潟市中央区万代3-1-1

TEL 025-385-7474（土日祝日を除く／10:00～17:00）

●ファクス 025-385-7476

●Eメール minor@niigata-nippo.co.jp

◎主催／農林水産省北陸農政局

◎共催／新潟日報社

◎後援／新潟県、新潟県土地改良事業団体連合会、JAグループ新潟

過去の紙面もご覧いただけます／

キャンペーン 特設サイト

「水利が拓く 実りの明日へ」検索







「水利が拓く 実りの明日へ」  
キャンペーン

## 2018年度総括シンポジウム&ミニマルシェ

# 水利がつなぐ農業の未来



### パネルディスカッション

## 地域農業を支える水利の力

～生産・土地改良の現場から～

- 出演者 ..... 坂本 淳さん（やぶかみなす生産組合長）  
山波 剛さん（有限会社山波農場代表取締役）  
加藤 達男さん（本町そ菜出荷組合長）  
緒方 和之さん（新潟県農地部長）  
●コーディネーター ..... 伊藤 忠雄さん（新潟大学名誉教授）



《講師》スノーテイズファーム㈱ 代表取締役  
佐藤 可奈子さん

### 基調講演

## 移住女子の実践 雪国・里山から 食と農発信

### プロフィール

1987年、高松市出身。2011年、立教大学卒業を機に十日町市池合集落に移住する。コシヒカリやサツマイモを栽培する一方、商品やwebマガジンなどを通じ、地域の学びや魅力を発信する。17年に「女性のチャレンジ賞」を受賞。新潟日報朝刊で「きぼうしゅうらく」を連載中。

田んぼ潤す雪解け水  
先人への感謝尽きず  
私が耕作している  
十日町市の集落は  
山あいの、田んぼは雪解  
け水が頼り。雪が解けて水に  
なり、その水を引く水路の手  
入れをするところから農業が  
始まります。雪解け水が田ん  
ぼを順番に回っていくので、  
その流れを把握するのは一苦  
労。「水のバトン」を次の田ん  
ぼへきちんと渡していくのは  
大変です。そのたび、集落の田  
んぼ全てに水が流れるよう先  
人が築いてくれたことに感謝  
します。移住して、折り、感謝  
する時間がとても増えました。  
移住して結婚し、子どもが  
でき、環境が激変しました。

思い出し  
たのは「子ども1人育てるに  
は村が1つ必要」というアプ  
リカのことわざです。農作業  
に子どもを連れて出れば、子  
どもは遊びを見つ、周囲の  
人にも助けられ、伸び伸びと  
することができ、高度成長  
期に農村から労働力が急激に  
出て行つてから、農業と暮ら  
しは切り離されてしまいまし  
たが、もう一度つなぎ直す  
ためにさまざまな取り組みを

地域と協調し農業担う  
有限会社山波農場 代表取締役  
山波 剛さん  
柏崎市別保地域は中山間  
の盆地で、3集落144世帯  
が暮らしています。高度成長  
で人口が減っていく中、地域  
農業を担うため父が会社を  
創業し、地域内1300畧の大  
部分を耕作しています。農業  
は土地利用型産業です。だか  
ら農業は地域のひとと協調し  
支えられ、恩返しをしなくて  
はならない。地域の人たちが  
できるだけ長く農業を続け、  
ここで暮らしていけること  
できます。

が当社の重要な役割と認識  
しています。  
田んぼは湧き水のみで慢  
性的に水不足です。集落から  
1人ずつ代表を出し、代表し  
か水路に触れない決まりを  
作り、水争いを避けてきまし  
た。（2020年度に供用予  
定の）市野新田ダムが活用で  
きれば、昨年のような干ばつ  
被害があっても安心してコ  
メを消費者に届けることが  
できます。

豊富な水で品質を維持  
やぶかみなす生産組合長  
坂本 淳さん  
深雪なすは手で搾ると水が滴  
り落ちるほどのみずみずさと  
皮の柔らかさが特長です。そ  
れにはうねの間に十分な水を溜  
めて栽培します。特に夏場は一  
気に水を入れないとお湯になっ  
てしまうため、豊富な水がない  
品質を保つことができません。  
現在は根から必要な分だけ水  
を吸わせる地下灌漑（かんがい）  
方式に転換しつつあります。蒸  
発する分が少なく、管理も以前  
より楽になり、品質向上と販売  
に力を注ぐことができます。

もともちきゅうりの取り組  
みは祖父の代から。販路は自  
ら開拓しました。田んぼもあ  
りますが、かなり前から園芸  
作物主体で経営しています。  
現在、ほ場整備が進められ  
ています。かつては毎朝一番  
に田んぼへ行き、1日に何度  
も水管理に行く暮らしでした  
が、バルブで管理ができるよ  
うになって田んぼへ行く時間

### 生活守る農業水利施設

新潟県農地部長  
緒方 和之さん

本県の農業水利施設は、資  
産価値で全国2位、耕地面積  
も北海道に次ぐ2位です。海  
抜ゼロメートル地域の越後平  
野では、鳥屋野湯の水を24時間  
信濃川に排水する親松排水機  
場（新潟市）などがあるおかげ  
で、地域の人は安心して暮  
らせます。農業排水施設が都  
市インフラも担っています。  
ただ、2023年度末には県  
内の農業水利施設の6割が耐  
用年数を超過するので、計画  
的に補修・更新していかね  
ければなりません。農業水利は  
農家だけの問題ではないこと  
をぜひご理解いただき、関心  
を持ってもらいたいです。  
一方、本県の農業産出額は現在  
12位です。これはコメに偏つて  
いるためであり、土地改良事業を進  
めることで省力化し、担い手確保  
園芸作物導入を進めていく必要  
があります。先人の作り上げた施  
設をさらに良くして次世代に渡  
すため、整備を進めていきます。

「農業水利大国」新潟  
園芸作物拡大へ期待  
新潟はコメ王国である  
とともに農業水利大国でもあ  
ります。用排水機場などのボ  
ンプ場の数は、農業水利施設  
で1位の北海道を抜いてい  
ます。このためコメの生産費  
に占める水利費のコストは  
北海道や東北地方のおおよそ  
2倍であり、不公平ともいえ  
ます。コメの消費が減少する  
中、農業は今、大きな転換期  
を迎えています。コメだけで  
なく園芸作物も作れるほ場の  
整備が必要です。本県には  
枝豆やナスなどの特産品が  
あり、県外へもっと売り込ん  
でもらいたい。園芸作物の拡  
大に期待しています。  
一方で水利施設は農業だ  
けでなく、私たちの暮らしに  
も大きく関わっています。稲  
刈りが終わっても決して休  
むことはありません。新潟の  
平野の風景や農産物、暮らし  
を改めて見つめ直すことが  
大切です。水利の力が支える  
地域農業と古里の豊かな実  
り、これがこれからも続くこと  
を願っています。

### 参加者の声

●農業と土地改良事業の  
関わりはすごく重要だと  
感じました。この機会に  
もっと発信してほしいと思  
いました。（10代男性・学生）  
●コメや野菜などを真剣  
に作り、努力している方々  
の話に励まされました。  
国・県の将来設計の重要  
性を認識しました。（60代  
女性・アルバイト）●地域  
農業に携わる方々の苦労や  
現状を聞くことができて参  
考になりました。ミニマル  
シェでは普段目にするこ  
のないものを買うことがで  
きました。このような機会  
が増えてほしいです。（40代  
男性・団体職員）

### 小さな市場 ミニマルシェ

日報ホールホワイエでは、これまで紙  
面にも登場したそら野テラス（新潟市  
西蒲区）、矢田営農組合（柏崎市）、JA  
北魚沼（魚沼市）が参加し、ミニマル  
シェが開催されました。コメやオー  
タムポエムなどの野菜のほか、漬け物や  
団子といった加工品を販売しました。  
会場を訪れた人は、「どうやって食べ  
るとおいしいの?」など農産物や加工  
品の特長、調理法などを生産者から



熱心に聞いていました。水利の恵み  
を受けた本県の食と農について知っ  
てもらう場となりました。



干しナスや特別栽培米のコシ  
ヒカリ、オータムポエムを使っ  
た創作料理。来場者は目を輝  
かせながら頬張っていました。

### 田園築く人間の風土 豊穡の楽土 次世代へ

新潟大学名誉教授 伊藤 忠雄さん

作家の司馬遼太郎は、「越後地  
方という広大なブロックには上杉  
謙信という天才が出なくてもそ  
れに似たものを押し出すエネルギ  
ーがあったんじゃないかと思われ  
る」と述べている（『歴史と風土』）。  
そのパワーの源泉を、氏は越後の  
「人間の風土」と見ている。

興味深い司馬の視点を推量しな  
がら、その実像を戦国期以後、越  
後平野10万畧の開墾に投じられた  
累々たる農民のエネルギーに投影  
することができるよう思われる。  
江戸初期から幕末にかけての越  
後は、広大な低湿地の新田開発を目  
指す成長期の国であった。開村数は  
同期間約4割も増え、コメ生産高も  
115万石に倍増し、黄金の穂波が  
大きな広がりを見せていた。

こうした穀倉地帯の形成過程で、  
新潟県人は他県の人よりも強い集  
団性と忍耐力を醸成してきたといわ  
れる。この「人間の風土」が、日本屈指  
のコメどころを築き上げた大きな原  
動力になってきたのではなからうか。  
コメの生産力の一つの時代を象徴  
する指標とするならば、わずかに半  
世紀余の日本のコメをめぐる時代環境  
は大きく変貌した。その結果、強固  
な共同体的機能を保持してきた農村  
社会は、農業者の急減や高齢化など、  
かつてない構造変動に直面している。  
これからの土地改良と農業水利  
事業は、こうした転換期の中で  
目指すべき針路が問われている。

その方向は、これまで築き上げ  
た「豊穡の楽土」を担う次世代の  
人に向けた農地整備と、社会イン  
フラともなっている水利施設の  
老朽化対策や田園空間の整備だ  
とはいえ、これらの実現のため  
には、農業者だけの内資的な力だ  
けではなく、多くの国民的合意も  
必要な時代となっている。

かつて、越後には時代を動かす  
エネルギーがあったという。それ  
を触発するこの「水利が拓く 実  
りの明日へ」キャンペーンのこれか  
らの確かな歩みに期待している。

### プロフィール

1944年、新潟市生まれ。67年、  
新潟大学農学部卒。専門は農業経  
営学。同大教授、副学長などを経  
て2010年に退職。15年3月まで放送  
大学新潟学習センター所長。12年  
から5年間、県内の先進的農業経営  
者を講師に招き、実践的経営論を  
議論する「新潟農業経営塾」を主  
宰。現在、新潟市農業活性化研究セ  
ンター名誉所長として新潟農業の  
課題などを問題提起している。

この紙面を読んだご感想を、ハガキ、ファクス、Eメールでお寄せください。

お問い合わせ

「水利が拓く 実りの明日へ」キャンペーン事務局（新潟日報社広告部内）

新潟市中央区万代3-1-1

TEL 025-385-7474（土日祝日を除く／10:00～17:00）

●ファクス 025-385-7476 ●Eメール minori@niigata-nippo.co.jp

◎主催／農林水産省北陸農政局

◎共催／新潟日報社

◎後援／新潟県、新潟県土地改良事業団体連合会、JAグループ新潟

◎企画・制作／新潟日報社広告局

過去の紙面もご覧いただけます／

キャンペーン 特設サイト

「水利が拓く 実りの明日へ」検索

